

## 留学生活で得たこと

長良高等学校 市川 凜（アメリカ合衆国）

一年間の留学を終えて、僕はたくさんの言葉では言い表せないほどのものを学ぶことができました。

まず留学中の大きな出来事は、学校が変わったことです。最初に通っていた学校にはひどい差別があり、英語を勉強するには良い環境とは言い難いところでした。ですから、「もっと良い環境で学びたい。」と思い、転校を決断しました。転校先は“Multi Cultural Academy Charter School”という学校でした。とても規模の小さい学校で、先生と生徒の関係がとても良く、何でも話し合える雰囲気がありました。しかし、この学校は独特な学校でした。ほとんどの生徒は黒人で、それ以外はごくわずかなヒスパニック系の人がいるだけでした。そのせいか、前の学校ほどではないのですが、人種の壁みたいなものをこの学校でも感じました。アジア系の生徒は僕を含めて3人だけです。学校の中には僕たちアジア系の生徒と壁を作らずに話してくれる人と、そうでない人がいました。それもやはり、「差別のせいなのかなぁ。」と思いました。

一方、やっと入れた陸上部ではそんなことを感じることはなく、同じ目的・目標を持つ仲間の中に差別的な雰囲気は全くと言っていいほど感じられませんでした。ある時、部活の一環として、“ブロードストリートラン”という国内有数の大きなマラソン大会に参加し、僕たちは16キロも走りました。あいにくの荒天となり、風雨の中ずぶ濡れで完走するのはかなり大変でしたが、ゴールした後に部活動の仲間と互いに喜び合えたことは、とても良い経験になりました。

また、留学も半年を過ぎると、1人で公共交通機関を使えるようになり、ダウントウンによく行くようになりました。そこではホームレスが、行き交う人にお金を求めています。僕は日本ではそのような人を見たことがありません。しかしフィラデルフィアだけでなく、ニューヨークやワシントンD.C.にもホームレスはたくさんいました。僕には、そんな人たちがどうしてそうなったのかも、どんな気持ちでお金を求めているのかも想像が付きません。そのような光景をあまり見たことのない僕にとっては、ある意味カルチャーショックでもありました。もし、自分の身近にホームレスのような人達がいたら、僕自身嫌悪感を持つだろうと思います。おそらく多くの日本人はそう思うのではないのでしょうか。しかし僕が見てきた限り、アメリカの人たちは、嫌な素振りを見せることなく、お金をあげる人や、ご飯を買ってきてあげている人もいました。そうすると大体ホームレスから握手やハグを求められます。僕はその光景を見て「えっ？」と行ってしまいました。ホームレスが不潔だと思ったからです。でも、実際援助してあげる方々は何のためらいもなくハグなどができています。これを僕は価値観や物の見方の違いだと思いました。おそらく僕たちは自分のことばかり考えてしまっているのだと思います。例えば「汚いからハグをしたくない。」「恥ずかしいからお金の援助をしない。」というのは圧倒的に自分中心の考え方です。これをきっかけに僕は、相手の気持ちを考えることができているのではないかと、自分に問いかけるようになりました。

確かにホームレスの人たちはおそらく安定した収入がなく、税金も払っていないと思います。しかし彼らも、なりたくてホームレスになっている訳では無いと思います。もし本当に相手のことを考えているのなら、ほんの少しでも援助することができると思うし、ホームレスの人が感謝の気持ちを伝えようとしてくれたなら、多少汚れているからと言ってハグを拒否するようなことは無いと思いました。むしろ握手やハグに応えるべきでしょう。

こうした経験で僕は、僕自身が少し人の目を気にしすぎているのではないかと気づきました。例えば、お年寄りに席を譲るとか、何か困っている人に声をかけるとか、時と場所によっては恥ずかしくてできなかったこともありました。しかし、アメリカでは僕のような人間はとても少ないと思いました。実際に地下鉄やバスに乗っていても、優先席に座るような人はほとんどおらず、もし座っていたとしても、お年寄りや体の不自由な人が乗ってきたときには、すぐに席を譲っていました。勿論アメリカにいるすべての人が席を譲るわけではなく、中には知らん顔をしている人もいます。けれど、そんな人がいると周りの人が「どうして譲らないのか、席を譲りなさい。」と話しかけます。僕は本当に驚きました。こんなことは日本ではほとんど起こりえないことだと思うからです。更に衝撃的だったのは、そうやって席を譲ったりしている人たちの中には、僕と同年代の高校生が多くいたことです。アメリカの高校生も日本の高校生も、日々勉強に追われているし、おしゃべりしたいとか、勉強するより遊びたいとか、そんな感覚は僕たちと変わらないと思います。しかし、日常生活や公共の場での責任ある振る舞いは、日本の高校生よりもはるかに大人だと感じました。アメリカの学校や社会、家庭が自然と生徒を大人にしているのだと思います。例えば学校に何を着ていくかは自由だったり、整髪料をつけたり髪を染めたり、ピアスを開けたりしても何も問題ありません。アメリカの先生は「それは生徒それぞれの個性であって、どんな身なりだろうが生徒の責任だ。」と言っていました。また、アメリカでは多くの州で16歳から車の運転ができます。車の運転をすることは、社会的責任を負うことにもなります。そういう意味でもアメリカは日本より、高校生に求められる責任が重いと思いました。僕は日本でも高校生のうちから社会的責任を持たないといけなと感じました。アメリカで出会った高校生は、自分自身に責任を持ち、堂々と社会の中で生きていくだけの知識や教養を身につけるために、学校で学んでいるのだと思います。ですから僕は受験のためだけでなく、自分自身が今後日本や他の国でも通用するだけの知識や教養、そして判断基準を身につけるために学んで行きたいと思いました。

僕はこの留學生活でとてもたくさんのことを学びました。特に自分の視野が広がり、今までとは別の視点で物事を捉えられるようになったと思います。それらをどう今後の生活に生かしていくか、考え続けていくつもりです。

